農林水産大臣賞

# 「ぼくがごはんつぶを残さないわけ」

山形県鶴岡市立西郷小学校五年
齋藤　隼也

ぼくは、ごはんつぶを残さない。今はそれが当たり前になっている。幼稚園のころから、お父さんとお母さんに、一つぶも残さないように言われてきた。世界中には、食べたくても飢えで死んでしまう人達がいることを教えてくれた。今だったらはっきり分かるけど、幼稚園のころは、あまり意味が分からず、ごはんを残してしまっていた。

ぼくには、ごはんつぶを残さないわけがもう一つある。ぼくの一年生の時の先生は、丸山先生だった。女の先生だけれど、かみ型が金太郎に似ていたので、みんなから『金太郎先生』とよばれていた。

先生は、ぼくをだき上げて、「ぎゅうっ。」としてくれた。あったかかった。先生の手は、ぼくの頭をなでてくれた。ぼくは、気持ちがゆっくりした。手を挙げると、

「真っすぐ挙げていい手だのう。」

と、先生は両手でぼくの手を包んでくれた。

先生はその手で、おにぎりをにぎってくれた。金太郎先生だから、毎週金曜日がおにぎりの日。金太郎先生が「ぎゅうっ。」とにぎってくれるおにぎりを食べると、ぼくは、金太郎になった。小学校の畑でとれた大根の葉をふりかけにして、葉大根おにぎりもにぎってくれた。とてもおいしかった。ごはんを食べる時、先生はいつも言う。

「この一つぶに、田んぼで働く人が見えるかな?。」

だから、ごはんは大事に食べようねって言ってくれた。

ぼくの家の米は、じじちゃんとばばちゃんが作っていた。ぼくは、ごはん茶わんにごはんが残ると、じじちゃんとばばちゃんのことを思って、一つぶも残さず、きれいに食べるようになった。お母さんが、

「すごいの。」

と言ってくれて、うれしかった。これからも毎日、一つぶも残さずに、大事にごはんを食べようと思った。

ぼく達は今年、学校田で米作りをしている。今は、ほが出てきて、ぐんぐん伸びている。けれども、田んぼの中には農薬の効かない雑草も出てくるし、虫も稲を食べてしまう。自分が育ててみて、米を作るのは、とても大変だということを実感した。草をぬいたり、稲刈りをしたりして、米をしゅうかくするまでには沢山の時間もかかる。でも、食べる人がすごく喜んでくれると思うと、ぼくもうれしくなってくる。今のぼくには、金太郎先生が言っていた田んぼで働く人が、米一つぶに、はっきり見える。

ぼくは、金太郎先生の「ぎゅうっ。」を忘れない。それから、一つぶの中に、作ってくれた人の苦労と手とあせがある米を、ぼくは絶対そまつにしない。これからも稲を育て、ごはんつぶを残さないようにしていきたいと思う。